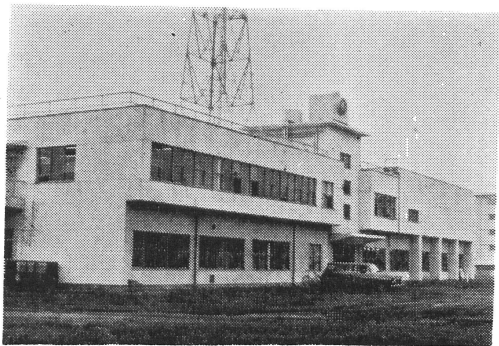


地方だより

東京航空地方気象台管制気象課

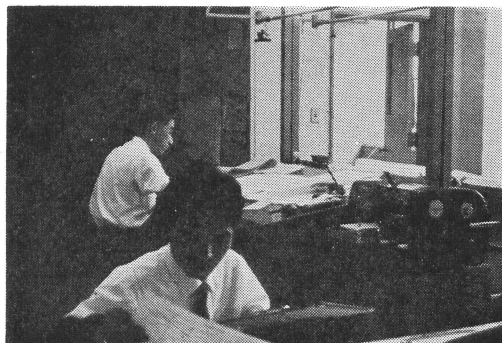


航空交通管制本部現業庁舎

昭和35年7月1日の発足以来3年間、埼玉県狭山市 Jhonson 基地（旧陸軍航空士官学校）の地下防空壕内に潜んでいたが、この5月5日子供の日の日曜日、午前2時をもって、一挙東京都北多摩郡久留米町の地上に姿をあらわし、課長以下22名の職員、文字通り天日を仰いだ。

業務切替えに、この日この時刻を選んだのは、日曜日の2時から3時の間は、航行中の飛行機の数が一番少なくなるからである。

鉄コン2階冷暖完、管制官の神経を和らげるため、壁は淡緑色の、colour conditioned、航空局の74mの大

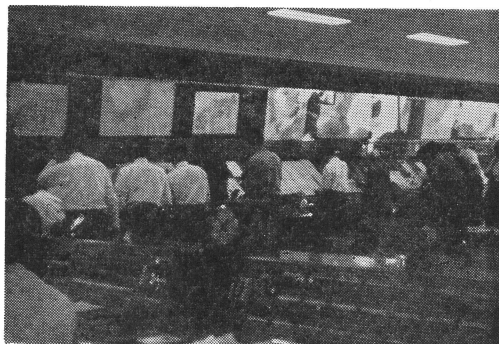


管制気象室

アンテナと、気象台の20mの小アンテナが立つ。

官制上は、羽田に本台をおく東京航空地方気象台の一課であるが、業務上は運輸省航空交通管制本部に直結し、事実上独立気象台である。1crew 4名（予報官2、予報官補佐1、通信1）の4crew編成で、東京FIR（Flight Information Region 飛行情報区）の航空気象常時看視の任に当る。

管制気象課は、航空気象台の第2予報課であり、メソ予報課であり、防災予報課である。ここでは、明日の予報は長期予報に属するが、向う数時間内の時間空間的にきわめて精密な予測が要求される。



航空交通管制室

天気が悪くなりはじめたとき、天気が良くなりはじめたとき、一般に天気の時傾度？が大きくなったとき、ここはものすごく忙しくなる。一番頭を悩ますのは雷雨である。雷雨の看視はレーダー絶対である。新設富士山レーダーの受像に期待すること甚だ大で、ちゃんと手廻しよく、予報室の一隅に受像室を作ってしまった所以ここにある。

この仕事は、ここ数年来懸案となっている箱根越え、三国越え、白河越えといった Highway service に一つの suggestion をあたえる。

（久米庸孝記）